エッセイ

最新のトイレにみる現代のこころ——トイレの自立と影の喪失

畑中千紘（こころの未来研究センター助教）
Chihiro HATANAKA

最近、汚いトイレを見かけなくなった。飲食店やデパートはもちろんのこと、駅やパーキングエリアなど公共施設のトイレでさえ、きれいに保たれていることが多い。特に、近年のトイレの機能の高さには目を見張るものがある。ドアを開けると、夜中でも目に優しいという柔らかな光に包まれた空間。ひとりでに蓋があき、温かく保たれた便座が迎えてくれる。洗練された音楽が自動的に流れ、不快音も気にならない。温水洗浄便座が乾燥までを行ってくれ、立ち上がれば自動的に水が流れる。悪臭はきれいに消され、代わりにいい香りがあたりを包む。さらには、水の跳ね返りを防ぐために便器中の水位を下げたり、自動的に清掃までこなしてくれるものまであるという。

近年ではタンクレストイレの開発に伴い、トイレは水回りに縛られることなく、どこにでも設置することが可能になった。そのため、リビングなどの居住空間の隅に直接便器が置かれる「壁のないトイレ」が実現されているという。さらに目を見張るのは写真に示したようなスタイリッシュなトイレである。これは「ドレッシングルーム」として提案されたものであり、もはや単なる「トイレ」とは言えないレベルである。“ノーブルブラック”の便器はおしゃれな椅子のように空間になじみ、洗練された小物たちとともに都会的でシックな雰囲気を醸し出している。トイレはもはや、暗くて臭く汚くて、家の裏側に位置づけられた排泄のための小部屋ではない。その昔「交屋（かわや）」と呼ばれ、異性や異界との接点ともされた不気味さとそれゆえの魅力は失われ、さらりと他の居住空間と交じり合っている。こうした現代の最新トイレ事情はわれわれのこころのどのような性質を反映しているであろうか。

歴史的にみると、排泄という日常的な営みに関わるトイレは人々のこころの構造の変化と同期した変化をみせてきた。たとえば、藤原京の時代には水洗式のトイレが都市の内部から外へと排泄物を流し、人々はそれを大らかな態度で用いていた。このようなトイレは当時の人々が自然と交わり循環する存在であったことをよく映し出している。13世紀頃、守護・地頭を中心に財を「所有・保持」する感覚が醸成された時代には、トイレは排泄物を肥やしとして「溜めておく」ものとなる。また、昭和以降に下水処理システムが構築され、トイレが屋内に設置されるようになると、排泄は、恥じらい、秘されるべき個人的な行為になるのである。

こうした視点からみると、最新のトイレは現代を生きる人々の「影のなさ」「主体性のなさ」を映し出しているように思われる。最新のトイレは、トイレにつきものの「臭」「暗」「汚」といった負の契機をすべて排除するように設えられている。立派に「自立」したトイレが不快を意識させないよう立ち回り、使用者は「臭い物に蓋をする」必要さえない。われわれは、自らの「影」に直面することなく、ぼんやりと主体性を失ったまま柔らかい香りや音楽に包まれるのみである。

「最近の若い人は怒られることに慣れていない」「発達障害の人は表裏がなく主体性に乏しい」などと言われるが、これらは本当に特別な一群の人々にのみ押しつけられるべき特徴であろうか。いやなものに直面しない、自らの影を引き受けない、主体性に乏しいといった特性は、現代を生きる人たちのこころ全体に浸透しつつあるものではないだろうか。世の中に提案される最新のスタイルが、われわれの意識に少し先んじてこころの行く先を示してくれるものであるとすれば、私たちは最新トイレの便利さに感嘆するばかりでなく、それが示唆してくれているものにも目を向けてみるべきかもしれない。

参考文献

高嶋雄介・畑中千紘・井上嘉孝・古川裕之（印刷中）「トイレ空間にみる現代の意識」『箱庭療法学研究』25（2）
高嶋雄介・畑中千紘・井上嘉孝・古川裕之（2010）「空間との関わりに表れる日本人のこころ　トイレ空間の誕生と変遷」『京都大学カウンセリングセンター紀要』39, 27-47.

ドレッシングルームとしてのトイレ（写真提供：LIXIL〔INAX〕）